高知県グローバル教育シンポジウム
「こどもたちが地域や国際社会で活躍するには～国際バカロレアで身に付けたい力とは～」

◎開会行事

（司会）
大変お待たせをいたしました。ただいまから「高知県グローバル教育シンポジウム」を開催いたします。
本日は、日曜にもかかわりませず大勢の皆様にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。感謝申し上げます。
本日の司会進行を務めます、高知放送の井津葉子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
それでは、開会に当たりまして高知県教育長、田村壮児がご挨拶申し上げます。

（田村壮児教育長）
皆さん、こんにちは。高知県教育長の田村でございます。高知県グローバル教育シンポジウムの開会にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日は年末を控え大変慌ただしい中、また貴重な休日の中をこのように大勢の皆様、おいでいただきまして誠にありがとうございます。
今、世界はグローバル化や情報化が急速に進む中で、変化が激しく先行きが不透明な社会となってきています。４年ほど前、ニューヨークタイムズに載った「この年に小学校に入学した子どもたちの 65%は、大学を卒業したときに今は存在しない職業に就くだろう」という研究者のインタビューが話題になりました。日本でもアメリカほどではないにせよ、今の小学生の多くが、今は存在しない職業に就くであろうというふうに言われております。このような時代になりまして、これからの高知県や日本の発展を担っていく人材には、激しい変化を乗り越える高い志や意欲を持った自立をした人間として、多様な人々と協働しながら新しい価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力を身に付けることが求められます。そのためには、教育の在り方も一層の進化が必要であり、現在、国の中央教育審議会で新しい学習指導要領の検討が行われております。
本日のシンポジウムのメインテーマであります国際バカロレアは、スイスに本部を置く国際バカロレア機構が提供する国際的な教育プログラムで、ハイレベルの英語教育とともに教科の枠にとらわれない探究的な学習や芸術、奉仕活動も重視する教育を行い、多様な文化を理解・尊重し、国際的な視野を持って行動できる人材の育成を目指しているものです。この国際バカロレアは、先に

申しました検討中の新しい学習指導要領の方向性を先取りし、しかも徹底した教育プログラムだと考えておりまして、国が昨年末に策定した「まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、2020 年までに国際バカロレア認定校を全国で 200 校まで増やすことが目標とされております。

高知県といたしましても、こうした先進的な教育プログラムを導入して、これからの高知県や日本を担う人材を育成したい。また、高知県のこれからの教育の在り方を変革していくリーディングスクールを作りたいという思いで、平成 30 年度に高知南中･高校と高知西高校が統合してスタートする新しい中高一貫教育校が、国際バカロレアの認定校となれるよう取り組んでいるところでございます。幸い、今年から５年間、高知西高校が文部科学省のスーパーグローバルハイスクールの指定を受けましたので、国際バカロレアの取組にも弾みがつくものと期待をしております。

本日は、東京大学の長谷川壽一先生、文部科学省大臣官房国際課の松木秀彰室長様から基調講演をいただいた後、国際バカロレア機構アジア太平洋地区委員の坪谷ニュウエル郁子様をコーディネーターとして、５人のパネリストをお迎えしてパネルディスカッションを行っていただくことになっております。講演とパネルディスカッションを通じまして、今後、社会から求められるグローバル人材とはどういったものか、国際バカロレアとはどのような教育なのかなどについてご理解を深めていただけるものと考えております。併せまして、グローバル教育などこれからの高知県の教育の方向性につきましても、一定のことがお示しできるのではないかというふうに考えております。このシンポジウムが、ご参会の皆様それぞれのお立場から今後のご参考としていただければ誠に幸いでございます。誠に簡単でございますけれども、開会に当たってのご挨拶とさせていただきたいと思います。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

（司会）

田村教育長のご挨拶でした。この後、基調講演に移らせていただきますが、少し舞台転換がございますのでお待ちください。

お待たせしました。それでは、基調講演のご案内をさせていただきます。

講師は、東京大学大学院総合文化研究科の教授で、今年３月まで副学長をお務めになっていた長谷川壽一先生です。ご専門は人間行動進化学、行動生態学ですが、副学長として大学入試改革に携わられるとともに、国の国際バカロレアアドバイザリー委員会の委員として国際バカロレアにも精通しておられます。演題は、「グローバル化する社会で必要な学びとは」ということでお話しいただきます。

それでは長谷川先生お願いいたします。

◎基調講演

「グローバル化する社会で、子どもたちが、将来、活躍するために必要な学びとは」

東京大学大学院総合文化研究科教授　　長谷川　壽一氏

ただいまご紹介いただきました、東京大学の長谷川でございます。ご紹介いただきましたとおり昨年国際バカロレアの委員会、文科省の中で開かれたものでございますけども、そこで委員をさせていただき、そのときバカロレアについてたくさんのことを学びましたので、それを踏まえて皆様にお話しをしてみたいと思います。本日のタイトルはここに書いてあるとおりなんですけれども、冒頭に当たりまして、少しそのグローバル化と関連して頭の体操をしていただきたいと思っております。

これは地球でございます。地球の中でもこれはアフリカでございます。見てのとおりでございますけれども、皆さんアフリカというのはどれぐらい広い大陸だかイメージできますでしょうか。ある研究者が、このアフリカの地図に他の国がどれぐらい入るかという物をパズルのような形で描いた地図がございます。それがこちらです。これを見ていただきますと、中国、インド、アメリカといった国々がすっぽり入るわけですね。具体的に見てみますと、そこにございますようにアメリカ、中国、インド、メキシコ、ペルー、フランス、スペイン、ニューギニア、スウェーデン、そして日本も入るし、ドイツ、ノルウェー、イタリア、ニュージーランド、イギリス、ネパール、バングラデシュ、ギリシャ。これらの国を全部合わせて、およそ 3,000 万平方キロということになります。しかし、アフリカはそれよりも大きいということで、こういう形でこれらの国々がすっぽり入るというわけです。私たちにとってアフリカと言うと非常に遠い彼方でありまして、そんなに大きいのかとちょっと驚く感じがいたすわけです。月の表面積にも近いというくらい大きな大陸でございます。この先、後で申し上げますようにグローバル化が進みますと、アフリカを中心に人口が増えます。GDP も増えていくと。その辺りが、これからの地球規模で見たときの、地球の世界的な変化の一つでございます。

もう少しアフリカを細かく解像度を高めて迫っていってみたいと思います。これは、赤道を中心にアフリカの地図を示してみました。幾つもの国が並んでおります。赤道直下の国としましては、タンザニアとかコンゴとかガボンとか、そのような国々がそこにございます。さらに迫っていきますと、これが世界で一番長い湖です。真ん中に見えるところですね。タンガニーカ湖という湖でございますけれども、このタンガニーカ湖に中央ぐらいに結構大きな半島がございます。これが半島ですね。この半島には景色をごらんいただきますと、ちょうど湖に並行に標高の高い山、ちょうど中国山地を思わせるような、湖面から

1,500m、急に上がるようなこのような山々がございます。そこの地域には、このような人々、民族で言うとトングウェと呼ばれる部族の人たちが日々暮らしておりまして、貧しいですけれども彼らの文化を持って暮らしているというわけです。人々が住んでいるだけではなく、そこにはチンパンジーが野生で暮らしております。

実は、私はここの地域のチンパンジーの研究と保護ということで、通算３年間この地域に暮らしておりました。チンパンジーは、我が家、手前の枠組みがうちのドアです。泥壁の家で、トタン屋根で、そのすぐそばまでチンパンジーが来て、チンパンジーとともに暮らしたと。実際の仕事は、チンパンジーのための自然保護の国立公園づくりということを、タンザニア政府と一緒にやってまいりました。当時の私でございます。今と違ってふさふさとした髪を持って、私はチンパンジーと同じ格好をしていますけれども、家内のほうは、これ家内なんですが、進化していますのでしっかり二足で立っております。

これは自己紹介になるわけなんですけども、現在、私は大学で教鞭を執っております。また、ご紹介にあったとおり大学で学部長を務めたり、大学の執行部で大学改革の仕事に携わったりしてまいりましたけれども、私が今の自分があるのも、この３年間のアフリカのこの土地で暮らして、現地の人々の文化に触れ、それからチンパンジーの研究を通じて人間とは何かということを、チンパンジーと人間は実は非常に近い生物で、チンパンジーから見て一番近い生物は人間なんですね。ゴリラじゃなくて人間なんです。そうすると、人間とは何かということを数百万年のスケールで考えられると。それから、日本についてもアフリカから見ることによって、地球規模でグローバルな観点で日本の文化についても考えられるということが、私のその後の研究にもつながっていますし、それから様々な仕事にもつながっています。今日のお話でも、私の体験がどれだけグローバルだったかというのはまだ十分ではございませんけれども、そういう背景もあるということでお話を聞いていただければと思います。

ここからが本題でございます。お手元にもここから後のことは資料で印刷されてございますので併せてご覧ください。グローバル化というのは（資料ｐ２）、下にありますように国際教育交流政策懇談会のところから引用しましたけれども、情報通信技術の進展、それから移動の容易化、市場の国際的な開放、それらによって国際的な移動が活性化する。様々な分野で国境の意義が曖昧になる。各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象をグローバル化と。少し難しい言い方になりましたけれども、国と国との垣根が非常に低くなって世界が一つになってくる、そういう状況でございます。別の企業のホームページから拝借した図でございますけれども（資料ｐ３）、左側がグローバル化以前のその企業。日本に本社を置き、左のほうに米国、欧州とございますけれども、そちらに工場なり支所があったと。そういう我々の日本の

企業が、20 世紀には大体こういう姿が多かったと思います。ところが、グローバル化が進むにつれて企業の構成が変わってまいります。全、例えば従業員のうち、日本人は既に半分を割り込む。米国、欧州のほかに例えばインドネシア、ベトナム、タイ、韓国、インド、中国に進出して、そこに支所ができ、そこに従業員がいるということになります。

私の知人の銀行マン、三菱 UFJ ホールディングスの 40 代の中堅の職員、社員さんでございますけども、その方にとっては部下は今や外国人の方が多いと。全ての仕事は英語で行うというのが当たり前になってきたという、そういう状況にございます。もちろん、日本で全ての企業がそうなっているわけではなく、日本に住む人々の全てがグローバル化に直面している、実際に実感するわけではございませんけれども、この先この流れは一層加速していくことが確実でございます。

これは（資料ｐ４）、左から 2011 年ほぼ現在、真ん中が 2030 年 15 年後、右側が 2060 年の国・地域別に見た GDP のシェアでございます。左側のピンク色と赤っぽい色のところが途上国・新興国。右側のブルー系プラス白、これが OECD 諸国でございますから、現状では GDP の３分の２は先進国が産出している。ところが、15 年後にはそれがほぼ半分ずつになります。さらに、2060 年になりますと現在と逆転してしまいまして、新興国が産出する富というものが全地球規模で見ますと３分の２になると、そういう時代でございます。

世界の人口を見てみますと（資料ｐ５）、上の図でごらんいただきますと、紫色の部分が途上国、それからグリーンの部分が先進国です。この先、先進国では人口の増加はないと予測されますけれども、途上国ではどんどん増えてまいります。特にアジア、アフリカでの増加が大きくなるだろうという、ほぼ確実の予測ということになります。他方、日本はどうでしょうか。（資料ｐ６）日本の人口のピークは 2005 年でございました。この時が１億 3,000 万近くいたわけですけれども、2100 年には 3,500 万人まで下がるというふうに予測されています。世界の人口がグローバルに見れば増加傾向にあるのに対し、日本では人口が大きく減少し、さらに人口ピラミッドの形が逆転します。すなわち、若い人が少なく高齢者社会が今以上に加速するということでございます。そうしますと、この真ん中に線がございますけれども、左側の高度成長時代の日本がライジングサンであった時代の教育の在り方と、この先縮小していく日本の中でどういう教育を若者たちにしていくかということに関しましては、大きな質的な変化というのが当然求められるわけでございます。

ここまでをまとめさせていただきます。（資料ｐ７）世界は大きく、今、流動化しています。これがグローバル化ということでございますね。この先、世界の市場や人口は新興国・途上国で拡大していきます。一方、日本の人口は大きく減少し若年層が薄くなってまいります。そのような状況で、次世代の人材を

どのように育てるかというのが正に大きな課題ということになります。教育の在り方の大きな転換点。ちょうど人口ピラミッドでピークのところがございましたけれども、上り坂のときの教育の在り方と、下り坂のときの教育の在り方、これは決して同じではないということをご認識いただければと思います。今日も若いお父様、お母様が多数お見えになっていると思いますけれども、皆様方のお子様たちが、この先教育を受けるときの在り方について、今、真剣に問い直す時期だというふうに思います。子どもの数が少なくなりますので、子どもこそがこれからの宝です。今、高齢化社会ということで高齢者のことを盛んに論じておりますが、むしろ大事なのは今の若者たち、子どもたち、これは金の卵、我々にとっては金の卵です。非常に貴重な金の卵です。最も重要な人材とも言える彼らにどのような教育を与えるのか、今日はそのようなことを、このシンポジウムを通じて皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

グローバル化と教育の関係でございますけれども、国際教育交流政策懇談会というのが文科省のもとにございます。そこに書かれている文章をそこにまとめてございますけれども（資料ｐ８）、青字の部分に注目いただければと思います。今後、社会はよく知識基盤社会というふうに言いますけれども、ものづくりだけではなくて、情報や教育そういうものが中心になる社会でございます。そういうグローバル社会においては、知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる必要があると。非常に高度な教育を受けた人材を社会が求めるようになる。あるいは奪い合うようになります。製造業に関しましても、海外移転等が行われ国内雇用の変化が生じます。また、異なる文化の人々との共存、それから国際協力の必要性というのが一層重要になってまいります。そのときに、どういう人材が求められるか、どういうことを子どもたちに教えなきゃいけないのか、という提言がここに（資料ｐ11）書かれておりますけれども、青字の部分をごらんいただきますように、お示ししましたように、基礎力、それから基本的な知識・技能の習得。実はこれは教育の基本でございますので、これから先に限ったことではございません。むしろ日本では、このような基礎力、それから知識・技能の習得に関しては、現在、世界でもトップクラスの水準を維持しています。しかし、それだけでは十分ではないというのが残りの部分でございます。課題を見い出し解決するための思考力・判断力・表現力、これが求められる。それを常に更新する。そして、生涯にわたって学び続ける必要があるということでございます。

我々、私はもう定年間近で還暦も過ぎておりますけれども、我々は、土曜、日曜は少し羽を伸ばしてゆっくり休めるわけですけども、これから先の皆さんは生涯にわたって学び続けなければいけないということで、大変といえば大変だと思いますけれども、知識というものを常にアップデートして学び続ける努力というのが今後求められるということでございます。共存や協力、これも非

常に重要なキーワードでございます。国と国との垣根が低くなりますので、人と人との交流というものが非常に重要になってまいります。一番下にございますように、「異文化を背景に持つものや、自然とともに生きることができる寛容な精神を涵養することが重要」というふうに書かれています。

先日、ある韓国文化について研究している方のお話を伺いました。たまたま韓国の大学の先生方が見えて、日本の研究者と一緒に懇談した場でございますけれども、その研究者の方が、日本の食文化と韓国の食文化の違いについて文化的な背景をご説明になりました。韓国の文化というのは儒教文化でございまして、親戚の皆さんが一緒になって、できるだけたくさんのものを一気に食べるというのが彼らの食事の基本でございます。その食べ方は、ご飯があればほかのものと混ぜ合わせて皆でできるだけ食べるという、同じものを皆でできるだけたくさん分かち合って食べる、これが韓国の食文化の核にあると。対して、我々日本文化は、仏教の影響を受けて、食べ物は例えば仏様に捧げるというように、なるべくきれいな形でよそい、一つ一つをきれいに並べて、それを少しずつ食べる。正に懐石料理の精神で、懐石料理を全部一つのお皿に入れて混ぜ合わせてぐちゃぐちゃにして食べるというのは、我々の文化から見るとちょっと想像できないことでございます。しかし、今後グローバル化が進んで韓国の皆さんと一緒に働くようになると、そのような食文化を共有しなければいけない。そのときに、お互いにお互いの文化の背景を踏まえつつ楽しい食事ができるかどうか。一つの例でございますけれども、そのようなことが問題になっています。私自身がいたアフリカでは、手でご飯を食べるというのが普通でした。スリランカという国でも調査をいたしましたけども、そのときは朝、昼、晩、全部カレーで、全部手で食べておりました。そのようなことが皆さんできるかどうか。する必要はないんですけれども、そういうことに対して寛容であることができるかどうかというようなことが、今後非常に重要になってまいります。

グローバル化時代の人材育成のまとめです。どういう力が求められているか。一つは日本人としての、これは得意な部分でございますけれども競争力ですね。基礎力でございます。しかし、単なる基礎力だけではなく課題発見、解決力、生涯にわたる学び。これが競争力として求められます。ただし競争するだけではなく、ほかの文化の方々、ほかの国の人々と共存し、協調していく力、異文化の理解。これは自文化理解も含めますので、多様な文化について理解し、寛容の精神を持つと。それから、世界的な課題を共通に認識するという、そういう姿勢でございます。そうしますと、これまでの常識や経験値だけでは対応しきれなくなります。これまでにはない人づくりの基本戦略を策定する必要があると。ちょうど、先ほど申し上げましたとおり、現在、金の卵の若い子どもたちを育てる教育の在り方に関して転換点にある、そういう状況に日本は置かれております。

さて、具体的に大学ではどういうことが起こっているんでしょうか。現在も大学人でございますので少し説明をさせていただきます。（資料ｐ12）文部科学省は、これまでグローバル化に対応するような様々な事業を展開してまいりました。2009 年以降、グローバル 30 という試みで大学の国際化。これは主に、日本に新興国からの優秀な留学生を引き付ける、獲得する。一言で言えば、留学生を受け入れることを主眼にしたプログラムでございました。日本の大学でもきちんと留学生を受け入れることができて、日本のいいところをきちんと学んでもらって、そして国に帰って、あるいは、グローバル企業の中で一緒に留学生と日本人が働けるような、そういう下地を作ろうという、そういう精神でございました。2012 年ごろから、少しずつ方向が変わりつつあるというふうに理解をしております。2012 年からは、グローバル人材育成推進事業ということでございますけれども、日本人学生の留学促進、日本人を送り出すという方に文科省の政策の軸足が少し変わったように、私自身理解しております。あとは、大学教育のグローバル化を目的とした体制整備ということで、大学が少し遅れている国際化について文科省が後押ししてくれると、そういう事業でございます。そして、昨年度からはスーパーグローバル大学等の事業ということで、大学をタイプ別に分けて、重点的に国際化を推進する大学を支援しようというものが進んでいるということでございます。先ほど、教育長様からの話がありましたように、高知県の高校も、これの高校生版のスーパーグローバル高校ということで指定を受けているというふうに伺っております。

これは、東京大学の取り組みでございます（資料ｐ13）。私が昨年度まで４年間、大学の執行部に近い中、あるいは近いところでこのようなプランを考えてきたわけですけれども、育成する、育てていく人材像ですね。金の卵である学生諸君を育てる。どういう学生になって欲しいかということでございますけれども、前の東大の総長さんのお名前は濱田先生という、濱田総長でしたが、濱田先生は口を酸っぱく「よりグローバル、よりタフな人材育成と人材の輩出」ということを言っておられました。

具体的には、グローバル志向、行動力を育てるということ。それから、課題発見、挑戦的な体験、異文化理解と尊重、先ほどまで私が繰り返し繰り返し言っていたことと同じ文言が、東大のこれからの計画、総合的な教育改革のキーワードとして並んでおります。左のほうに、基礎学力と先端地への好奇心。これは、東大が伝統的にずっと明治以来やってきた教育の中で重視してきた部分ですけれども、それはワンオブゼムになっているということですね。さらに、公共的責任感、巨視的な判断力ということで、広く世界を見据え、それに対して自分自身が公共的な人間として責任を果たし、非常に長期的な展望のもとにいろいろ判断ができる。そういう人材を東大としては育てるんだという基本方針でございます。

それに伴いまして、いくつもの改革を今年 2015 年度から始めました。(資料ｐ14)その詳細については、ここでは詳しくはお話ししませんが、それの三本柱のうちの一番目が国際化ということでございます。そのほか、国際化、実質化、高度化とございますけれども、まずは国際化。国際流動性の向上、送り出しと受け入れを更に加速させる。グローバルキャンパスの実現。これまでの大学の窓口は全部日本語だけでしたけれども、多言語対応をする。それから、学習機会を多様化する。というようなことで国際化を推進するというものを最初の柱に挙げております。これまで、日本の大学の１年間の学事暦、アカデミックカレンダーと呼ばれますけれども、それは海外の大学のアカデミックカレンダーと少しタイミングがずれていたので、なかなか短期留学でさえしにくい状況だったんですけども、その辺も是正するような試みが始まっております。

さて、次に現在の若者たちの実力はどれぐらいなんだろうかということを、もう一度確認しておきたいと思います。(資料 p15) グローバル化社会での現在の中高校生の学びの実力は、実はトップクラスです。皆さん、PISA という試験、テストをお聞きになったことがございますでしょうか。OECD の生徒の学習到達度調査で、科目としては、数学的なリテラシー、読解力、科学的リテラシー、その３つの分野に関して数年に一度試験が行われております。その結果を見てみますと、(資料 p16) こういうふうになっております。一番右側が 2012 年度、直近の結果でございます。その前が 2009 年。その前が 2006 年。その前が 2003 年。要するに、３年ごとに調査が行われておりますが、2006 年度のときに随分成績が下がったんですね。底だったわけですけれども、そのときにトップだったのが、例えば有名なフィンランドの教育というようなことでございました。ところが、2006 年から 2009 年、2012 年と、日本の成績は確実に上昇しております。先ほどの数学的リテラシー、科学的リテラシー、それから一番伸びしろが大きかったのは読解力ということで、いずれも成績が伸びております。OECD 諸国では本当にトップ、あるいはトップクラスでございまして、右肩にございますように１位２位ですか。ということで、先進国の中でも非常に高い水準にあるということございます。恐らく、2000 年代後半にゆとりの教育の見直しということで、かなり集中的に授業時間なんかを増やしたということも、この背景にあるのかもしれません。ですので、このような試験の成績は、日本では十分な水準にあるということでございます。

グローバル社会の中での中高校生の学びですけれども、(資料ｐ17) この先どのような学びが必要かということです。一つは、知識集約型の学び。一言で言うと詰め込み型の学びで、これは日本が非常に得意なところでございました。解答のある学びですね。偏差値教育と言ってもいいかもしれません。こここの大学に入るためにはこれだけの偏差値が必要。こここの高校に入るためにはこのような偏差値が必要。そのためには塾に通って「この科目あなた弱いん

だからここまで引き上げる」と。そういう詰め込み型の教育で、これはいずれもテストで計ることができ、回答のある学びなわけですね。
これは、先ほどの釣鐘形のカーブでいうと、右上がりの高度成長の時代には、このような教育は非常に重要でした。日本の高い技術力というのは、このような知識集約型の学びに支えられてきたと言っても過言ではありません。この部分に関しては、日本は誇れると言ってもいいかもしれません。けれども、グローバル化が進んできますと、途上国が追い上げてまいります。電化製品でいうとサムスン１社が、現在ではパナソニックや東芝やソニーや日本の８社を全部合わせた売上高の２倍を、韓国の１社だけで製造すると。そういう時代になっておりますので、伝統的な我々の強みというのが今後ずっと続くとは言えません。シャープも液晶テレビで、亀山ブランドであと半世紀ぐらいは世界をリードするのかと思いますと、現在のシャープの苦難の時代というのは、10 年前には予想もされなかったということでございます。

我々がこの先、何を子どもたちに期待しなきゃいけないかということでございますけども、これに加えて、課題発見能力、情報を統合する能力、多様な文化の理解。これも先ほどから繰り返し申しております。それには自文化も含みます。海外の皆さんとお話をするときに、「じゃあ日本はどうなってるの」と言ったときにきちんと答えられるかどうか。そのような力も問われてまいります。それから、世界的課題の認識。これには、環境問題、エネルギー問題、民族間の紛争の解決の在り方の問題、そのような問題が含まれます。コミュニケーション力。これらは、受け身の学びではなく、能動的な自分自身が学ぼうという、そういう学習方法によって得られるものでございます。ですから、教室の中で先生が一方的に教育をするというよりも、いかに生徒さん、学生さんたちが主体的に学ぶかということが、今、求められています。

それに対して、大学の側、私どものほうも入学試験制度を少しずつ変えようとしています。（資料ｐ18）まさに転換点でございます。これまでの大学の入試が、まさに考えさせるもの、東大入試の場合はですね。東大の入試は非常に考えさせる問題を出しておりますけれども、しかし、あくまで正解のある問題でした。一般学力試験というのをやってまいりまして、国内では東大はその頂点に達したわけでございますけれども、今年から入試改革をいたしました。単によーいどんの点数競争ではなく、AO 入試や推薦入試が始まったということでございます。東大の場合は、まさに今、初めての推薦入試をしているところでございます。京都大学も同様に特色入試、これは AO でございますけども、AO 入試を初めて導入いたしました。各大学が入試を複線化しています。私立大学の多くはもう既に、AO や推薦で募集する学生さんの比率が、かなりの部分を占めるようになってきました。そうしますと、単に偏差値のみということではなく、自分の強みをどうアピールできるか。そういう生徒さんを求めてるわけでござ

います。

これは、今年の東京大学の推薦入試学生募集要項でございます。（資料ｐ19）東大の推薦入試の基本方針でございますが、ここも青字の部分（資料ｐ20）をごらんいただければと思います。学部学生の多様性を促進すると。この 10 年ぐらい見ますと、首都圏の進学校の、それも男子生徒の比率がだんだん高まっておって、地方の県立高校の優秀な学生さんが一浪してでも入ってくるというようなことも減っておりますし、女子学生の比率もむしろ低下する傾向、伸びない傾向が見られておりました。そこで、学部学生の学部教育のさらなる活性化を図るということで、中等教育における先進的取組を積極的に評価し、これは高大連携ということでございますけれども、生徒の潜在的多様性を掘り起こすという観点から、日本の高等教育学校との連携を重視するということで、推薦入試を始めました。そこで求められる学生ですけれども、総合的な教育課程に適応し得る学力、基礎的な学力に加えて特定の分野や活動に関する卓越した能力、もしくは、極めて強い関心や学ぶ意欲を持つ志願者を求めると。東大に入ってくる学生は、これまではすべての教科満遍なくできてなきゃいけなかったんですけれども、特定の分野で活躍できそうな天才とまでいかないまでも、偉才を持つような人たちを積極的に取ろうということでございます。そして何より、一番下をごらんいただきますと（資料ｐ21）、グローバル社会の活力の源として活躍すること。これが期待される学生像ということになります。

具体的に、東京大学の法学部の推薦要件（資料ｐ22）、学部ごとにこういう人材が欲しいというのが書かれていますが、とりわけグローバルな場でリーダーシップを発揮する素質を持つ学生というふうに明記されています。真ん中の辺りには、解決すべき課題を設定する能力。その課題の解決に主体的に貢献する能力というのが謳われております。そして、学部側に求める、推薦の中で求める書類の中の一つに、国際バカロレアというのが謳われております。東京大学教養学部（資料ｐ23）、これは私の我が学部でございますけれども、ここでも新しい分野に挑戦する意欲を持ち、グローバル時代における諸問題の解決を目指す。そういう学生を求めるよということを謳っておりまして、学部が求める資料の中に、その一つとして国際バカロレアも利用しますよということを宣言しております。

さて、現在この入試は進行中で、ちょうど募集者に対してどれぐらい出願、手を挙げた人がいるかというのが出てきたところでございます。今、ここで赤字で囲っている部分（資料ｐ24）、これ、多分数字読めないと思いますけども、これからお話ししますように、今言ったグローバル化ということを全面に出した法学部、それから教養学部ですね。私の学部。これが２倍から３倍の推薦があったということで、今、他の学部の悪口を言うわけではありませんが、経済とかその他の学部ではここまで伸びていないということで、やはりグローバル

化に対する関心の強さ、この辺にも現れているのではないかと思います。もう一つは理学部で、これは数学オリンピックや科学オリンピックの優等生というものを求めるので、当然といえば当然だと思います。グローバル人材育成を謳う学部への志願者が高いということでございます。

以降、お手元にある資料は（資料ｐ25）、国際バカロレアに関する説明でございます。しかし、この国際バカロレアに関する説明は、この後、文部科学省の松木室長のほうから、より分かりやすいパワーポイントで具体的な説明がございますので、ここは私が駆け足で終わらせていただきたいと思います。

国際バカロレアとは、お手元のチラシにもございますように、ジュネーブに本部を置く国際バカロレア機関が提供する国際的な教育プログラムで標準化されています。現在、140 以上の国々で 4,000 校以上が参加していると。そのうち、ディプロマ・プログラムという大学入試資格に関しても 3,000 校近い高校が参加しています。IB の使命を見ますと、先ほど私が説明したグローバル化の時代に求める人材像にぴったり重なっております。多様な文化の理解と尊重、探究心、知識・思いやりに富んだ若者の育成。それから厳格な評価の仕組みの開発ということで、非常にきちんとした標準化が行われていて、それぞれの高校が勝手な教育をするのではないということでございます。人が持つ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心を持って、生涯にわたって学び続けるように働きかける。先ほど話してきたとおりです。韓国の人と一緒に食事をしても違和感を感じないでいられるような人材は、このようなプログラムで育成されます。IB で育てる人材というのはこのようなものであるということは、お手元のパンフレットのほうにも書かれてございます。

カリキュラムでございますけれども（資料ｐ28）、現在の日本の高校にはないコア科目というのがございまして、課題論文、大学でいえば卒業論文にあたるようなものを、日本語の場合ですと 8,000 字程度で成果発表をすると。後でご登壇になる長嶺さんなんかもこれを書かれていて、私も読ませていただいたことがありますけれども、東大の卒業論文にも負けないぐらい立派な論文を書いています。知の理論というのも、これも非常に重要で、自分なりのものの見方、それから他人との違いを自覚できるような、そういう違いを促す知識とは何かということをきちんと考えさせる、そういう科目が提供、用意されています。現在、これらの大学で既に大学の入試の中に組み込まれております。日本再興戦略にしろ、教育再生実行会議にしろ、国際バカロレアを推進すべく 200 校まで増やすと。あるいは、日本経団連の方でもこれを後押しして、単に 2018 年度までに 200 校に増やすだけではなく、それを教える教員の養成にも力を注ぐべきだというふうに謳っております。

まとめでございます。（資料ｐ32）グローバル化が進んで、世界の構造はまさ

に大きく変わろうとしています。日本の場合には、質的な変化が極めて大きいわけですね。少子化と高齢化が進む日本で、グローバル化に対応する人材育成を行うことが喫緊の課題となっております。求められる能力は、課題発見・解決能力、異文化あるいは多様な文化の理解をする能力、コミュニケーション力等が中心になってこようかと思います。これには英語も含まれます。中高等教育は現在、複線化が求められます。国際バカロレアは、グローバル化に応えるプログラムだと思うということで、私の話を終わりにさせていただきます。

本日、私は実は飛行機ではなく、新幹線とそれから電車を使いまして高知まで入りました。高知県の非常に素晴らしい自然を見ながら、また、山の村々を拝見しながら、この先高知県がどうなるんだろうかということを考えました。多分、子どもたちの数は減ります。人口も減ります。その中で、高知県の貴重な子どもたちが、この高知県の素晴らしさを、高知県の自分たちの文化を守りつつ、さらに、世界に対して貢献できる、羽ばたいていける。そういう人材をどういうふうにつくるのかということを、教育関係者の皆さんとご父兄と、それから生徒諸君がみんなで一緒になって考えて、よりよい高知県の人材育成を発展させていただきたいと思って、私の講演を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

（司会）

長谷川先生、ありがとうございました。

では、続いての講演に移ります。準備のほうさせていただきますので、お待ちください。